〔書　評〕

庶民生活史研究会編

『同時代人の生活史』

冨山一郎
細辻恵子

本書の九篇の生活史について、分野の違う二人が分担して書評を担当した。それぞれの関心のあり方にしたがって、冨山は歴史学、とりわけ社会構成史を意識しながら本書の眼目を考察し、細辻は社会学の立場から、従来の客観的な方法論に問題を投じるものとしての生活史の意義を検討した。観点は異なっているが、生活史の語り手の「迫力」、われわれをひきつける魅力をどのように読み解けばよいのか、あるいは受けとめればよいのかをめぐってあれこれ考えたという点において共通点があると思われる。

なお、本書の構成は、以下のようになる。

まえがき
Ⅰ
一　開拓農民の生活史……黒柳　晴夫
二　離島出身者の生活史……森川眞規雄
Ⅱ
三　海女――一漁村女性の生活史――……後藤　和夫
四　主婦の生活史……木村　都／筒井　清忠
Ⅲ
五　野鍛冶の生活史……安藤慶一郎
六　鉱山労働者の生活史……松本　通晴
Ⅳ
七　失対日雇労働者の生活史……浜岡　政好

八　木賃住宅の町に住みあう人々の生活史……岩崎信彦
九　地方政治家の生活史……西村雄郎
あとがき……居安正・鵜飼孝造・春日雅司

一　「生活史」と歴史学

本書に収録されているのは、「庶民」の人生である。しかしそれはたんなる履歴書の羅列でもなければ、研究資料として掲載されているわけでもない。それは本書の執筆者たちに対し、「庶民」自らが自らの言葉で自分の人生を語って聞かせた、いわば自己主張なのである。本書を読んでいると、自分で自分の人生を再構成し、それを目の前の執筆者たちに一生懸命主張している「庶民」の姿が目に浮かぶ。そしてその執筆者の背後に、我々読者がいるのだ。読者は「庶民」の発する音声を直接聞く事は出来ない。我々に届くのは、彼らの自己主張を執筆者たちが再度整理してくれた人物像のみである。しかし本書がある種の迫力をもって我々読者に迫ってくるのは、執筆者の筆力というより、「庶民」が自分の言葉で自分の人生を主張している姿がそこに浮かび上がってくるからなのである。かかる意味において本書に収録されている人生は、自画像という性格を帯びているのであり、この自画像という性格こそ本書の迫力なのである。ここで行いたいのは、こうした迫力を本書の真髄であるととらえ、それを軸に評を加えることである。

さてなぜ迫力にこだわるのか。それは本書が次の様に読まれてしまう事を危惧しているからである。危惧している読み方、それは事実の拾い読みである。つまり資料として読む。本書の話の中になにか新しい事実はないか。かかる読み手にとっては、本書に収録されている話が客観的事実かどうかという点が極めて重大問題になる。たとえば村の戸数が一七五戸というがそれは本当だろうか、工場の賃金が二四円というが高すぎはしないか、といった具合である。かかる読み手は、本書の真髄が自画像の持つ迫力に存することを看過している。自画像にとって重要なのは、自画像に描かれている本人にとっての事実なのであり、我々にとっての事実ではない。

ではかかる主観的世界を認めた上で、いかなる読み方があるだろうか。一つには、その自画像の背後に存在して彼らの主観的世界を形作っている社会経済的条件を抽出しようとする社会科学者の読み方があるだろう。いいかえれば、「庶民」が語る生々しい言葉を、社会科学的なメタ言語に解読しなおしていくという読み方である。しかしかかる読み方をしていくにつれ、我々は執筆者の背後で「庶民」の生々しい自己主張を見つめていたあの臨場感が薄れていくのに気がつくのである。本書の真髄は、あくまでも自画像のもつ迫力なのだ。またもし、かかる解読が本書の目的なら、そうそうたるメンバーである執筆者自身の手によって明快な分析が行われているはずである。メタ言語に還元しながら読みたいという欲求を抑えながら、あくまでも自画像の持つ迫力に目をすえようとするとき、本書が何を問題にしようとしているのかが、うかんでくるのである。

本書で扱われているのは人生なのであり、それはその人間自身に密着した経験の集大成なのである。しかし人生においては、降りつもっていく雪のように経験が積み重なっていくわけではない。そこではさまざまな出来事の取捨選択が行われ、その人間にとっての重要な事件や出来事というものが、経験となって人生を構成していくのである。従って人生はおのずと出来事の再構成という側面をもち、そこにはある種のまとまり、あるいはロジックが存在している。またそのロジックこそが人生を自画像たらしめ、迫力をもたらすのである。かかる人生のロジックは、メタ言語により理解されるものではなく、人生そのものの筋道にそって把握されなければならない。彼らの主張する言葉自身をテクストとして解読するという、いわば文芸批評のような解読方法が求められるのである。本書のねらいはここにあると思われるのである。

具体的にみていこう。第一章に登場する開拓農民の山上百亀氏は、愛知県北設楽郡富山村漆島部落に長男として生まれた。山上氏の家は蚕と山林労働でようやく生計をたてていた零細山村農家であった。この山上氏は小学校当時のことを次のように述べている。「とにかく富山

（村）じゃぁねぇ、学校を卒業したら、『お前はいいなぁ、弟息子だで、どっかの大工や左官、丁稚で町へいけていいなぁ』っと、こおくるだで。長男はそんなこたぁできんで、『ここでお蚕飼え』、なんちゅう格好でねぇ」。また学校に行くのも父親から「半分学校へいって半分家の仕事をせよっ」といわれたという。そこには次三男のように村を出ていけない、学校も自由にいけない零細農家の長男の苦悩がうかがえる。こうした苦悩は彼を開拓農民志願へと導いていく。しかしそれは念願の夢であった村からの脱出ではなかった。村を出るとき「この村でさえろくなことをしとらんだもの、今更でてってなんになる。あんなもん達に開拓やなんか出来るわきゃない」などといわれ、村の人間に認めて貰いたいということが開拓農民としての彼の生活を支えていくことになるのだ。生まれ育った村へのこの様な想いを胸に秘めながら、黙々と農業を続けてきた山上氏は、自分の人生をふりかえり次のようにいう。「とにかく（開拓にでてきて）よかったこたぁ、まぁこれだけの畑が自作農になったちゅうこと。それと富山（村）へ帰っても、『どんな風にやってるか？』ってゆわれても、『困った、困った』なんてゆうことゆわんようになったことだが。なんとか郷土の人も、わしらが開拓地でがんばっとるで安心せられたことたぁ思うが、……」。そこには長男としての苦悩、村を出たという負い目を乗り越えた自らの人生への自信がある。ところで歴史研究において近代社会における都市への流出は、農村における家父長的な伝統的意識を解体させていくものとして描かれることが多い。しかし村を出ていく次三男に対して山上氏がいだいたのは、長男としてのこだわりであった。逆にかかる長男としてのこだわりが、村から離れることを決意させる。しかも村を出た彼をとらえていたのは、強烈な村意識であり、村を出た事への負い目だったのである。それはこれまでの歴史研究が想定していた枠組みからすれば、意外なことかもしれない。

第二章でとりあげられる鹿児島県甑島出身の中村国博氏の人生は、更に意外なものである。甑島の瀬々野浦に

長男として生まれた中村氏は、阪神地域へ労働者として流出する事をごく当たり前の事だと考えていた。「小学校卒業するときから、必ず島で農業はしないんだという気があった」、「誰でも一度は島を離れるのがあたりまえ」で、「他所へ働きにでなければ一人前とはいえない」というわけである。先の山上氏においてみられた長男としての苦悩は、そこにはない。では中村氏は共同体的な諸関係から解き放たれ、近代的労働者として阪神地域の資本主義的な労働市場に包摂されていったのだろうか。彼の人生は、この様な安直な近代社会の歴史像を見事にひっくり返してくれる。中村氏は、同じ瀬々野浦出身者と共に都市を生きていくのであり、強烈な同郷意識こそが彼の人生を形作っていくのである。もしそれを、あの「出稼ぎ型」という枠組みをもって理解しようとしたら間違うだろう。彼の雇用先は決して「出稼ぎ型」が想定しているような低賃金労働市場ではない。むしろ神戸製鋼という大企業において職長という地位につく時期にこそ、彼は同郷者の指導者として登場するのである。

我々は、重工業労働市場の拡大による「出稼ぎ型」の解体が近代的労働運動の形成として描かれることも、また農村が次第に資本主義的労働市場へ包摂される事によりうまれる近代的労働者に類比された自らの労働への価値意識の目覚めが、小作争議を生み出すとされることも知っている。そしてこの様な理解の背後には、プロレタリア化が階級意識という社会的意識の形成過程であるとするマルクスやレーニンにより打ち立てられた公準が存在しているのだ。この公準からすれば、山上氏や中村氏の人生は意外なものとしてうつるだろう。またこの様な意外な事例に出会うと、それを解読し得る新たな公準をつくりたいという欲求にかられる。しかし、ちょっと待ちなさい、と本書はいうのである。確かにこれまでの公準の検討ならびにより普遍的な公準を作る作業は必要である。しかし本書の意義は、普遍化をするための材料を提出したところにあるのではない。普遍化するまえに「庶民」の人生自身に存在する道筋、あるいはロジックといったものを明示化する必要があるのではないか、と

いうのである。

山上氏において人生という自画像を形作るのは、長男としての苦悩であり、村を出たという負い目であり、またそれを乗り越えた確固とした自信である。彼の人生から普遍的なものを導く前に凝視しなければならないのは、こうした自画像としてのまとまりなのである。また中村氏の人生は農村でもなく都市でもない、両者が連続的につながっている同郷の世界により形作られている。しかしそこからまず看取されなければならないのは、農村と都市とが一つの生活世界としてあらかじめ形成されていたという事ではなく、中村氏自身が自らの人生のなかで紆余曲折を経ながら一つの生活世界をねりあげていったという点である。やや詳しくみよう。前述したように「他所へ働きにでなければ一人前とはいえない」ということでごく自然に阪神地域へ出てきた中村氏であるが、戦後直後に瀬々野浦に帰村する。そこで父と農業をしながら青年団活動に没頭し、食糧調達をめぐる「大事業」をなしとげる。彼を一人前にしたのは、この青年団活動における「大事業」なのだ。その後再び阪神地域に出て行くが、父親が亡くなったのを契機に再び帰村している。彼はその時期の頃を、「ここで百姓するつもりで来たんですよ。…オヤジは、『とにかく百姓を継げ』やったんです。先祖代々の百姓を絶やすなということなんです。私は長男ですから」と述べている。しかし「百姓はつらい」、「百姓が大嫌い」という中村氏に母親は「もう、お前には百姓はみこみないから、おまえの好きなようにせえ」といい、中村氏は三たび阪神地域へ出ていく。しかし最終的には瀬々野浦に帰ってくる事になる。彼はそれを「『ああ、子供さえ一人前にしたら、私は田舎にひっこむんだ』と、そんな気持ちがあったからできたんですよ」と述べる。中村氏が瀬々野浦と阪神という二つの世界を一つの世界として生きたということは、あらかじめ用意されていた一つの世界を生きたのではなく、彼自身がさまざまな出来事のなかで紆余曲折を経ながら一つの世界を作り上げたという事なのである。そのプロセスは偶然の出来事に左右されており、なかなか一

般化できるものではない。しかしいかに偶然の出来事が重なっているとしても、それを一つの生活世界へと構成していくロジックというものが中村氏の人生の中には存在している。かかる意味において青年団での「大事業」は、重要な位置を占めているといえよう。人生を材料にして普遍化し公準を作るまえに、こうした人生という自画像に看取されるある種の筋、流れ、ロジックというものを凝視する必要があるというわけである。

いま、普遍化するまえに、といった。しかしこれは、ひかえめないいかたである。そもそも本書に収録されている人生は、普遍化できないものかもしれない。たとえば第九章に登場する三森政治氏の人生をみてみよう。かれは鳥取県日野郡日野上村の小作人の子として生まれ、後に県議になった。一度は郷里を離れ県庁に勤めた三森氏が政治家を志した理由として、彼自身さまざまな主張をしている。第一の主張は地元日野の地域開発の遅れである。「これじゃいかんなぁ……いずれ奥に帰ってですね。そういう点を正さにゃいかん」というわけである。しかし今一つの主張として、「五反百姓の悲哀」がある。子供のころ小作人のせがれとしての惨めさを味わった三森氏は、いつしか郷里の人々に評価され、見返してやるという気持ちを醸造させていくのである。更に、郷里にすむ母親のめんどうをみなくてはならないという長男としての意識も存在する。またこのように人生を決定づける政治家への道について、いざ立候補した理由という事になると「人に勧められて」とも述べているのである。かかる人生の一大事に関する主張の多様性は、人生という自画像が理路整然としたものではなく、多様性をもち、時には相反する主張により構成されていることを示している。つまり人生のロジックとは、社会科学的な論理構成とは異なり、いいかげんで、矛盾に満ちたものだといえよう。にもかかわらずそれが説得力をもって我々に迫ってくるのは、生きてきたリアリティーとでもいうべき人生の実在感を伴っているからなのである。今かりに三森氏の主張に何らかの公準をあてはめ、その多様性を普遍化しようとすれば、そこには自然と取捨選択が

働いてしまう。例えば極端な場合、彼が地域開発と密着した利権誘導型の政治家になったのは私利私欲の為であり、これらの主張は私利私欲をごまかすためのものであると解読する場合もあるだろう。しかしそのような解読によりこぼれ落ちてしまうだろう多様な三森氏の主張に存在するリアリティーを重視するなら、人生という自画像にはがんらい普遍化し得ない、メタ言語では解読できないようなロジックなり筋なりが存在していると考えたほうがいいのではないか、という気持ちになってくる。

マルクスは「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、むしろ逆に、人間の社会的存在が彼らの意識を規定する」（『経済学批判』序）という。人間は社会的存在であるというこの前提は、いわば社会科学の根幹に関わるものであり、かかる前提を立てるなら、「庶民」の人生という自画像もその社会的存在位置から説明されなければならない。個人の人生は社会に還元されなければならないし、歴史を構成する主人公は個々の人生ではなく社会のみである、ということになる。社会構成史。しかし個々の人生はそれ自身として、自画像としてのまとまりをもっているのである。ここで迫力という感覚的表現で示したかったのは、生活史というスタイルにより本書に収録されている個々の人生の自画像としてのまとまりなのである。そこには社会科学としての歴史学（社会構成史）にたいして、人生自身の中に筋道やロジックを見いだそうとするいわば文芸批評のような歴史学が看取されるのである。いま両者の関係を安直に整理するのは避けておきたい。しかし社会科学が歴史的実在に制限されるということは、たんに事実に目を向けなければならないという実証主義的立場を意味しているだけではなく、人の人生という強烈なリアリティーへのこだわりでもあるはずだ。そこには未整理の、あるいは整理することが不可能ないくつもの経験が積み重なっている。歴史を構成しているのは、かかる理路整然とはしていないが確固としたまとまりをもっている「庶民」の人生である事を忘れてはならないのである。三森氏は決してごまかしを言っているわけでもなければ、うそをついているわ

けでもないのだ。

以上のように本書の真髄を設定しておいて、最後に論点を提示しておきたい。問題にしたいのは、人の自画像としての人生を描くところに生活史の真髄があるということを認めた上で、もういちど社会を歴史の主人公にする方法が模索されなければならないのではないか、という点である。それには公準を作る事しかないのだろうか。

前述した第九章では、三森氏のほかにもう一人古くからの地方政治家である生田泰治氏をとりあげ、その人生と三森氏のそれを対置させている。つまり人生の比較により一般化を図ろうとしているのである。その結果、二人の人生を行政機構の浸透にともなう地方名望家から実務型政治家への変化としておさえている。人生の比較から地方政治家の類型を導く手腕は見事である。しかし三森氏の人生を凝視すればするほど、評者には生田氏と三森氏の地方政治家としての類似性が気になる。たとえば生田氏の「例えば就職の斡旋ね。その確率はなんぼであろうともですよ、おかしなもんですね、頼んどきゃ安心するでしょ。どっちにころんでもいいようなやつは沢山ありますわねぇ。どっちでもいいなら県会議員に頼んだ方をいれますは」という発言と、三森氏の「人の世話というのはですね、みなの話の雑談の中では『いちばん世話ぶりのいいのは三森だ』といわれるぐらい。…就職、それから結婚というようなのは、かなり頼まれもしますし、世話をしますし。それらが一番手堅いですね、票としてはね」という発言は、名望家と実務家という類型をこえた地方政治のありようを示しているように思われる。また三森氏が実務型と認定される重要なポイントである公共事業の誘導についても、三森氏は「実際に早くなったかどうかしれんけど、『三森が口をきいて早ようしてもらった』というようなかんけいですね」、「それなりにタッチしますと、その功績は別として、『三森のためにできた』とこういうとり方が、素朴な住民感情ですので」と述べている。これは、三森氏の公共事業の誘導には、たんに利害誘導というより、「頼んで安心」

という生田氏にも通じる要素が存在していることを示している様に思われる。もちろんこうした点は著者が提示する地方政治家の類型を否定するものではないが、行政機構の浸透による名望家支配から実務型政治への変化という政治史的文脈にダイレクトに接合さす前に、人生の比較において検討すべき側面はまだ多く残されているように思う。

寝屋川市萱島を扱った第八章では、記述の焦点が人の人生ではなく、居住空間を同じくする人々に定められている。つまり主人公は人の人生だけではなく、寝屋川市萱島という地域社会なのである。人の人生においてさまざまな出来事が起きるように、地域社会においてもし尿処理場問題、市議会選挙、暴力反対運動、神社とお祭り再興などの出来事が歴史として存在する。そこでの論点は、地域社会の歴史においても、人の自画像としての人生と同じように、当該社会のリアリティーに密着したまとまりやロジックが描きうるのかという点である。この点に関して第八章に限っていえば、まだこれからの課題のように思われる。とくに「神社を核とする精神的一体性が伝統と保守に向いていることは疑う余地はない」ことをいきなり前提にして、同地域の歴史から「新しいコミュニティー」を導こうとするところはやや強引である様に思われる。

だがしかし、人生を描く生活史が人々の歴史を描き得るかどうかは、自画像としての人生の如く、社会を描き得るかどうかという点にかかっている事は疑いない。本書が一人の人間の人生ではなく、ほぼ同時代を生きてきた一〇余名もの「庶民」の人生を並べて収録した意図は、人生ではなく社会の歴史を描く事にあると思われるのである。がんらい歴史学とは、我々が我々自身の社会の自画像を描く事ではなかったのか。本書が歴史学に投げかけるメッセージはこれである。かかるメッセージにこだわっていくあたりに、生活史と社会科学としての歴史学との接点が見いだされるように思われるのである。

（富山一郎）

二　「生活史」とことの世界

生活史（ライフ・ヒストリー）とは個人もしくは一つの集団の全生涯を、社会的文脈の中で詳細に記録したものである。資料として、その個人や集団の残した記録、日記、書簡、あるいは聴き取りを行なうことなどを用いるが、もっぱらこの手法を基盤とした社会学の業績は、思いのほか数が少ない。補助的にのみ用いられてきたといえよう。そのような状況において、農漁村地域社会の研究者たちの中から「同時代に生きる人々の多様な生き方の追求」を課題としようとする動きが出てきた。その柱として、生活史の手法を模索しながら、第一段階の成果として編まれたのが本書である。この庶民生活史研究会が、本来地域社会研究に取り組むメンバーより成っているという性格から、本書において、「生活史研究は、地域社会研究を補充して新しく一つの領域を獲得することが可能ではなかろうか」との見通しが呈示されている。おそらく、その方向に向かって生活史研究はこれからさらに地歩をかため、人間と社会との関わりに興味を抱く人々の要求にこたえていくであろう。また、地域社会研究にとどまらず、社会学の方法論の中で、生活史は独自の意義をもつと思われるので、その点をのちに考察してみたい。

その前に、本書の四編（他五編については冨山氏が担当されている）をとりあげ、駆け足の紹介ではあるが、各執筆者がどんなスタイルで生活史をまとめようと試みているのかみていきたい。

第三章「海女――一漁村女性の生活史――」。伊勢湾、熊野灘はわが国最大の海女漁業地帯だが、ここに登場する海女は志摩町に住む山口紀佐江さん。昭和六二年現在、六八歳で最年長の海女としてまだ現役で活躍している。生家も海女兼業農家であり、同じ村の義兼さんと結婚後、一男二女をもうけ、病身の夫に代わって家族の生活を支えてきた。この生活史で山口さんが選ばれた基準は、村人として「一人前」にすごしてきた以外に特別な業績も経験もない、ふつうの「村の女」であることであ

る。そしてその女性の主観を通して「日常的な実態」が語られる。半農半漁のこの村は戦前まで村内婚慣行が残り、孤立状態に近かった。漁獲物からみると女性が主役の磯漁業の生産が魚類の生産を上回り、女性の働きが村の生活に占める大きさはかなりのものだった。戦後は真珠養殖業の発展と高度成長期の労働力流出により海女を継ぐ女性が減り、昭和五五年で平均五四歳と高齢化が進んでいる。

山口さんの子ども時代は、蚕の世話と家の手伝いに追われ、学校へは仕事の合い間に行く程度であった。高等科を出て二二歳で結婚。この村では女の家へ男が「寝泊まり」にくることが結婚生活の始まりで、子どもが生まれたあと、夫の家に入るが、たんすなどは親許においたままで往き来する。夫が戦地から戻ってから夫婦で組んでフナド海女を始め、戦後十余年は働き手もそろい、収入も安定し、貯金もできたが、昭和三〇年代半ばから夫と子どもに病気やけががふりかかり、山口さんはサッパ海女（十人くらいが一つの船に乗り組み潜水）に移り、収入減を補うために、貝掃除、繕い物、旅館の手伝いと忙しく働き、看病に明けくれた。経済的余裕がないため、子どもたちに高校までで我慢してほしいと言わざるを得なかったことが、二人にとっては負い目である。

海女たちは、フナド、サッパ、カチド（徒歩で磯から海に入って獲物をとる）どうしで七つの火場仲間を構成し、その仲間は平等に仕事を分担し親密で親類か兄弟のようなつきあいをしている。山口さんは娘たちに海女はさせたくないと思い、実際に娘たちは海女にならなかった。山口さんたちにとっては、生活が苦しいゆえにせねばならぬ仕事ではあったが、「人間がする商売やない」「お金にはなるけどなあ」との言葉の中に、時代の変化を見てきた人の感慨がこめられている。

この生活史は、執筆者の「フィールド・ノート」に、口述原稿をかなり縮減せざるを得なかったので、内容のもれ落ちた部分を心残りに思うと記されているが、たしかに、山口さんの語る話はどれをとっても非常に興味をそそるおもしろさがある。たとえば、「夜這い」、結婚

の決め方、「頭病み」症状、「いやいや（失神）事故」、「中絶または流産」（海女の仕事の期間と出産が重なると収入を失う）、競争意識、収獲の少ないときのけんか等々。そして、戦後の産業構造の変化の中で、子どもたちの世代はまったく違った人生を選び、親もそれを淡々と受けいれていくさまをみてとることができる。今後、山口さんの生活史完全版を目にする機会に出会うことを期待したい。

第四章「主婦の生活史」。ここでの登場人物は「中流」サラリーマン家庭の主婦二人である。執筆者は主婦に照準を合わせるにあたり、人口の大半がサラリーマン家庭の出身者となっている現在、その家庭での主婦の存在が無視できなくなっていること、つまり、子どもの養育の有形無形の環境作りという点で母親としての主婦の役割が重要であるという観点を拠り所としている。

最初に、Kさんは彦根の病院長の長女として明治四四年に生まれた。住まいは洋館で、六人兄弟にそれぞれ女中が一人ずつつくという恵まれた子ども時代をすごしている。女学校卒業後、お琴、お花を習い花嫁修業をしながら、昭和八年友人の兄と結婚。式と披露宴を終えるとすぐに東京へ行き新生活を始める。昭和一三年、公務員の夫に従い満州の新京に行く。官舎はスチーム暖房つきで快適だったが、外は零下二、三〇度の厳しい寒さだった。次女、三女が生まれたが、太平洋戦争が始まり、ソ連参戦をきいて朝鮮へ逃げたが捕まって収容所に入れられる。ここで長男が生まれたがすぐに死亡、また三女も亡くしている。戦後新京へ戻り、翌年リュックひとつで長女と次女を連れ大分に帰ってきた。夫がシベリア抑留から帰国したのが昭和二二年、翌年に次男が誕生するが、次女を病気で失う。戦後の娯楽といえば、子どもを知り合いに預けて映画を見に行くことだったが、昭和三五年か三六年頃にテレビを買ってからは行かなくなった。昭和四五年に次男も結婚し、夫婦二人の生活となる。昭和五六年に夫を亡くし、息子夫婦と同居するに至った。

もう一人のTさんは、大正一二年に内務官吏の娘とし

て東京に生まれる。転勤が多く、三歳で福岡、五歳で樺太の豊原、そして長崎、宇都宮、東京へと戻ってきたのが一二歳。女学校を卒業するとき、英語だけできても中身が伴わなければと思い、女子大の家政科に入学。女学校の頃から読書に没頭の時期をすごす。昭和二二年、銀行員と見合い結婚、二四年長女出産。夫が海軍からわけてもらったバター、チーズをおなかの子のためにと食べる。二七、二八年に次女、三女が生まれる。三二年名古屋に転勤し、その後も広島、東京、大阪、東京と転勤が続き、四六年に家を建てるまでは社宅暮らし。新しい家はセントラル・ヒーティング、最新の台所、ベッドと洋風の生活様式に変化し、三女が婚出した五三年以降はカルチャーセンターなどにも通い、円高を迎えた五五年頃からは毎年海外旅行に夫婦で出かけ、趣味に忙しい毎日を送っている。

以上の二人の生活史は、ほとんどが語り手の口述であり、側面からの補足はない。たとえば第三章の海女のところでなされたような地域社会の中での位置づけが見出されない。「特に日常生活の細部に注目しつつ」主婦の生活を追う方針がとられているので、主婦が地域社会の中でもっている関わりなどが拾い出されなかったのかもしれないが、やはりもう少し社会との接点が明らかにされる方針も加えて頂きたかったと思う。

本章の生活史が、サラリーマンの中でも「中流」家庭の代表としてとりあげられ、「標準的な消費生活を送った」とされている点については、そのような規定がなされる過程が記されていないので、読者として少々困惑を感じる。「中流」については、周知のように一億総中流意識といわれるほど、日本は意識の上で「中」と考える人たちが多いが、実態としては、その中でも生活水準の上下の開きは大きい。執筆者が「中流」とみなしているのはどのような生活内容なのか、その明確な像が生活史と交錯しながら表われてほしかったところである。このことは、消費生活の「標準」とも当然かかわってくるが、どのような指標をもってきて標準と認定されているのかが曖昧である。報告された生活史におけるあまり多

くない手がかりから推測する限りでは、二人とも庶民女性というには豊かで余裕のある（とくにTさんの場合）生活を享受し、「中流」という言葉を用いるなら、岸本重陳流の「ミドル・クラス」（日本の「中」意識をもつ層の大半はこの基準に達しない）とよばれるかなり高い水準の生活を意味しているといわねばならないのではないだろうか。そうであれば、二人が代表する生活は、日本の大半の人々の生活よりも上の水準を示すものとしてとりあげられた方が適切であろう。これらの生活史の中で興味深かったのは、Kさんの満州生活、収容所生活、日本への帰国、あるいは父の妾だった人が妹二人の結婚の仕度をすべてしてくれたというエピソードなど、現時点からすれば、しだいに忘れ去られつつある人間関係や生活体験である。むしろ、このようなことがらを追究する方が、生活水準、消費生活で何か平均的、典型的なものを抽出・提示するよりも生活史研究の本分なのではないかと思われる。

第五章「野鍛冶の生活史」。ここでは、鍛冶職人の手仕事に魅入られた執筆者が愛知県内の野鍛冶について、北設楽郡、常滑市、東加茂郡、瀬戸市、西加茂郡などを訪ねて調査した記録が主である。これまでの二章とは対照的に、その人の一生をきいていくというのではなく、現在野鍛冶をしている十人（他に一代記を残している人もとりあげられている）の、原材料、製作工程、商品、商圏、技術修得、組合、職人の生活、技術伝承などについて簡潔にまとめられ、全体としては技術史が中心となっている。村々をまわり農具の修理をしていた野鍛冶は、昭和三〇年代後半、経済の高度成長に伴い、安価な製品の普及などによって急激に減り、技術を伝えようにも後継者がいない状況である。

生活史として少し詳しく紹介されているのは、最初に登場する初代松岡与四郎の生活（回想録による）と最後の野鍛冶職人中村義行さんである。彼らの生活史を簡単にみてみよう。松岡与四郎は明治二二年に生まれ、十歳で堤防工事に、一一歳で奉公に出、一三歳で鍛冶屋の小僧になった。兄小僧はとても厳しく辛かったが石にかじ

りついても辛棒して一人前になりたいと励んでいた。主人はあまり指導してくれないので、毎晩ひと寝入りして眼がさめると起きて仕事にかかり、そのうち一人前刃物八丁を上回って造れるようになった。しかも値段も少し高く売れるのでなおさら励み、それを見た主人は兄小僧には出さなかった玉子を毎日与えてくれた。二四歳で主人がさがしてくれた女性と結婚し店を始める。商売は順調に繁栄し、息子たちも鍛冶職を継ぎ、徒弟も六、七人住みこんで家の中は賑っている。

他の野鍛冶職人も徒弟制度で技術を習得しているが、やはり親方は何も教えず、「仕事は見ていて盗め」の方式が多かったようである。昭和一〇年代は食料の増産が叫ばれ、農具づくりは多忙だったという。この頃、県下一斉に「野鍛冶組合」が結成されたが、戦後はいつしか消滅し、もとの姿に戻っている。

中村義行さんは大正三年に生まれ、一四歳のときから毎年上志段味の細工場に通っている。昭和の初めごろまで、細工場へは大八車に衣類や生活用具を積み、親方から小僧までそろって二日がかりで歩いて行ったが、その後電車を利用して便利になった。細工場へ着くとあいさつまわりをし、在所へ帰るときは隣の人たちを招いてもてなしたものだが、この習慣も中村さんの代になると衰退した。農繁期は在所で農作業をし、農閑期（ほぼ八カ月）を出稼ぎ鍛冶ですごす。現金払いの人はほとんどなく、年末前と盆前に集金をした。最盛期には得意先が五百軒にも達したが、父親が昭和二七年に亡くなり職人もいなくなって一人でするようになると、得意先は減り、細工場にもちこまれる鍬や備中の修理をするぐらいになっていった。昭和五八年、職業病ともいわれる膝の故障が出たので七月に細工場を閉めざるを得なくなった。本章では、もっぱら職業人としての一面に徹して解説が加えられているので、その人が自分の一生をどのように生きてきたかの全体像が浮かび上がらないが、生活史に比重をおいたアプローチで再構成がなされる機会を待ちたい。

第六章「鉱山労働者の生活史」。冒頭に鉱山労働者をうたった川田順の歌をかかげ、執筆者は、この生活史の主

人公の少年時代を、夏目漱石の「坑夫」の一場面を重ね合わせるようにしてスタートさせる。別子銅山は昭和四八年に二八二年の長い歴史を閉じたが、そこで一五歳から働き、昭和四二年に退職した森さんの生活史を軸に、他四人の鉱山労働者からの聴き取り、かつての坑内労働者を対象に行なった「鉱山労働者調査」の結果、あるいは村史や別子銅山関連の資料も駆使して、鉱山での生活のありさまが、さながらドキュメンタリー・フィルムのように再現されている。大正二年高知県に生まれた森さんは、小学校一年のとき祖父母とともに両親のいる別子の辷り坂社宅まで五日間かかって山を越えていった。高等二年を卒業するとき、父は大工になれと言ったが、別子で働きたいと思い、部落人事係か総代を通して申し出るという手続きをふまずに、直接課長に会って使ってほしいと頼む。これが功を奏して、なかなか勇ましいとほめられ、不景気の昭和三年にたった一人就職をかちとった。高等小学校では甲組は労働者の子ども、乙組は職員の子どもとわけられていたが、生活全般にわたって両者には差がもうけられており、たとえば、風呂も別々、映画、芝居の観覧席も別々、労働者は買物を調度課でするが、職員は炭、薪、米などを人夫に家へ運ばせ、弁当も坑道まで運ぶ係がいるというように、格段の違いがあったことに、森さん自身も反感をもっていたことをおぼえている。昭和一一年に結婚。兵役には三回ついている。兵隊として働き者でない筆頭として坑夫と船乗りがあげられていたが、森さんはその常識を疑わせるほどに一生懸命やったという。鉱山労働者はふつう雑役夫から始め、負い夫（運搬夫の旧称）、坑夫、さく岩機夫、支柱夫と位が上がっていく。森さんは雑役夫を一年、負い夫を四年、そして坑夫、さく岩機夫と昇進していったが、あるとき分任にとりたてられた。これは、仕事の割付の助手、そして掘場をまわる職務で、いわば班長、組長、一般の人の長である。そしてさらに昭和二〇年、弱冠三一歳で支柱夫をとびこえて準職（担任）を命じられた。この抜擢には周囲の人々が皆びっくりする。月給六四円は高給で、ボーナスも多く住まいも広くなり、昭和二〇

年は日本の歴史の節目でもあったが、森さんの生涯においても最大の転換点であった。担任の上の主任には、定年退職する三年前になっている。主任になるのはわずかな人に限られ、しかも大半が学歴のある人たちの中で森さんの昇進を考えてみると、いかに信頼され能力を認められていたかが理解されよう。

昭和初期のやまの社宅生活の人間関係の濃さは、この生活史のもうひとつの主人公と思われるほどに印象深い。毎日が危険と隣り合わせで、今日もまた無事に出てきたという気持ちで生活している人たちの、仕事の外での時間は、互いに生きていることの実感を日々確認しているような昂揚感に充ちている。これは大量の娯楽にとりまかれ食傷ぎみの現代人が見失ってしまった感覚である。労働者たちの長屋は、六畳一間に押入れもなく、所有に由来する満足とは縁遠かったであろうが、三軒長屋が一家族のような、あるいはもっと広く社宅全体が一家族のような親密な雰囲気の中で連帯感が培われていった。「住」についてはぜいたくができなかったが、「食」にはお金をつぎこんだことが森さんの口から生き生きと誇らしげに語られる。生きた魚が届けられ雑魚ものは食べなかったという食生活は、潜在的に「いつどうなるかわからない」という死の危険性に裏打ちされていた。死が身近であるからこそ、川田順の歌にもあるように、入坑時に、そして出坑時に大山祇に礼をして祈りをささげるのである。ある人は「それはことばで言い表わすことができない心境でした」と表現するが、たしかに、このような仕事の経験がない者にとって深く理解するのは困難であろう。しかし、鉱山労働者の生活の時間の流れを通して、語る側の人の世界に入りこめたときには、言葉以外のものの力で、伝わりにくい心境、つまり人が生きるということにたどり着くことが多少とも可能になると思われる。執筆者が「フィールド・ノート」に記している「坑内で石蓋を被って働く者たちの生への畏敬の念」は、鉱山労働者が別子で働くこと、ひいては生きることに対してもっていた畏敬の念と相通じるところがあり、それが、この章の生活史の奥行きの深さ、そして迫力と

でもいうべきものを生み出している。

以上、四編についての評を短く記したが、ここで、社会学において、自然科学をモデルとした方法論からは距離のある「生活史」の手法が、地味ながら昨今注目を浴びつつあるという傾向に関して、木村敏の考え方を土台として考察を加えてみたい。木村敏はものとことを区別する（これについてはいくつもの著作で説かれているが、代表的なものとして中公新書の「時間と自己」をあげておく）。ものは我々の世界空間を満たしており、外部の世界だけでなく、意識という内部空間もやはりもので満たされている。デュルケームが社会学の方法論を確立しようとしたとき、社会的事実をもののように観察せよと主張したが、それは西洋の科学観に基づいている。すなわち、ものを客観的に観察することが科学の本領とされているのである。ある距離をおいて観察するもの＝対象がなければ、科学の営みは成立しない。しかしながら、木村敏は、この世界には客観的・対象的なものとして現われるのではない世界の現われ方があると指摘した。たとえば、私の前に机や原稿用紙があるということ、そしてその上に字を書いているということなどさまざまな場面で立ち現われてくることは、もののように客観的に固定できず、不安定である。そうすると、私たちの意識はその不安定さを好まず、ことの現われに出会うや、たちまちそこから距離をとり、それを見ることによって、ものに変えてしまおうとする。

このようにものとしてのあり方とことしてのあり方は違うのだが、現実の世界においては純粋にどちらかとして現われるのではない。元来、意識の働きはものを見出すためにあるということを考えてみれば、意識によって見出される限り、どんなこともすべてもの的な姿をおびることになる。ものの背後にはことの世界があり、それはものとことの共生関係とよばれている。芸術作品は、もの的な表現素材（絵画や音楽）を通じてこと的世界を開示しているが、人間の表現行為においてもものに即してことを感じとるという構造がある。たとえば表情から心の動きを読みとる場合がそうである。そして日常

生活では接するものの各々にこと的世界が背後にあることを人は感じているが、それがあまりにも自明のことになってしまっているがゆえに意識にのぼってこないことが多い。しかし、こと的世界が厳然としてあることは重要なことなのである。

それを示すために離人症についてみてみよう。これは、たとえば、あれは松、あれは屋根、あれは空と知覚はできるが、それがひとつのまとまりのある風景と感じられない、事物の実在感、現実感、重量感などが失われ、自己ということがわからない……という症状を呈する病である。ここで欠落している感覚がことの世界についての感覚である。これらの訴えは、健康時の生活において、世界のもの的な知覚を背後から豊かに支えていること的感覚が一挙に消失すると、世界はその表情を失うのだということを照射している。

この考え方から学ぶべき点は、人間が生きているということをできるだけ理解したいと思うならば、意識がものとして捉えるときにすり抜けてしまいがちなことの世界の豊かさに接近しなければならないということである。しかし、ことは目に見えるように提示できないので、この接近は容易ではない。厳密に言えば不可能であろうが、人は、ことの一端を表現するために言葉を用いることはできる。もちろん、この花は赤いということは「この花は赤い」という言葉によって表現されつくせるものではないが、ことは言葉によって語り、それを聞くことによって理解する以外にないのである。それをふまえた上で、言葉によって捉えられるのはことの表層部分にすぎないことを再確認することは、生活史の手法においてとても重要な点だと思われる。たとえば、二人の語り手の口から同じセリフが出てきたとしても、両者の生活体験に応じてどのような思いがこめられているかが、微妙に、あるいは大いに、違ってくる。すなわち、それぞれの人のこと的世界への理解がなされなければ、ものとして現われるセリフを誤解してしまう可能性が高くなるのである。したがって口述の内容だけを忠実に再現したとしても「生活史」としての意義を果たしているとは

いえない場合もあり得る。「生活史」というとき、その人の一生という時間の流れを把握することもまた、非常に重要な要件である。なぜ重要なのかと考えを進めていくと、やはりこと的世界の議論の延長上に答となるものがみえてくる。

ある人にとってことがこととして成立するためには、その人が主観としてそこに立ち会っているということが必要である。そしてさまざまなことがその人のいまを構成している。人が自分は自分であるということをあたりまえと感じているならば、その人のいまは豊かな内容で充たされた安定した静止状態として体験され、そのひろがりがあるゆえに時間というものを切れ目のない連続として思い浮かべることができる。未来と過去がまずあって、そのあいだにいまがはさみこまれるのではなく、いまのひろがりを「いまから」と「いままで」との両方向に展開してみたときに、そこで初めて未来と過去のイメージが浮かび上がる。その人が「自分は自分である」として生きてきたとき、いまのひろがりがずっと続いてきたのであって、この時間の流れが、その人に、生きてきた道程を語らせている。そして、その時間の流れはものではなくことの世界である。再び離人症患者の例でわかりやすく示せば、彼（女）にとっては、バラバラでつながりのない無数のいまが次々と出てくるだけで、一瞬も同じところにとどまらず、それらには何の規則もまとまりもない。これはことの世界を欠落させ、ものとしてのみ時間を感じとっているからである。「生活史」において語り手の口述を、単にものとしてのみ羅列してしまったら、おそらく、離人症的作品があらわれるだろう。時間を失って、無数のいまがつながりもなく非連続に継続するだけの「症状」を呈するだろう。それが何らかの情報を伝えているとしても、「生活史」として迫力のあるものにはなり得ない。「生活史」は、個人の年表を作成してあとをたどるのではなく、語り手のこと的世界を捉えるものでなくてはならない。そのためには、いまのひろがりに注目することになり、すなわち、それは語り手の主観が立ち会ってきたことをいまの時点に至るまで問

い来たることになる。

木村敏が「時間と自己」の最初の見出しとして「ものへの問いからことへの問いへ」という表現を用いて含意していることは、ちょうど社会学においても、科学として方法論が明示されてほぼ一世紀たった今、新たに「生活史」の手法を自覚することによって始まろうとしている。もちろん、これまでの社会学の蓄積も、社会の中での人間の営みについて数多くの新しい視点をつけ加えてきたことにおいて有益ではあったが、西欧的な認識の枠組をこえた地点からの問題の立て方によって人間の生きるさまを探究する新しい試みとして「生活史」の手法に、期待をしたい。

（細辻恵子）

（一九八九年三月刊、未来社、三三九頁、四八〇〇円）